



図書館長  
飯島 昇藏

## Nosce te ipsum vs. Read thyself

17世紀のイギリスの哲学者トマス・ホッブズは、『リヴァイアサン』の序文において、知恵は書物を読むことによってではなく、人びとを読むことによって獲得されるという格言が近頃しきりに濫用されている事実を嘆き、真に役に立つ新しい読書を薦めている。「本を捨てて街へ出よ」ではなく、「人間たちを読め」という読書離れの傾向を憂慮するホッブズの態度は、しかしながら、はなはだ曖昧である。というのもその傾向には哲学の急進的革新者ホッブズにとって歓迎すべき点が含まれているからである。

ホッブズが目撃した読書離れの傾向は、古い書物が伝えるスコラ哲学、なかんずく、アリストテレス哲学の無視さらには拒絶を著しく加速するであろう。新しい真理が受け入れられ、普及されるためには、人びとはまずもって古い誤謬から解放されていなければならない。

しかしホッブズは、周囲の人びとを読むことで本当に知恵を獲得できるのかを懸念する。言行一致という理想それ自体が、人びとは他人の行為よりもその発言によって騙されがちであることを雄弁に語っている。しかしひととは行為によってもまた騙される。それではわれわれは何をなすべきか？ホッブズはもう一つ別の古い格言 Nosce te ipsum を Read thyself と読み替えて、汝の「心を探究すべし」という方法を提案する。この方法は、しかしながら、主観主義の誤謬に陥る危険はないのか？「全国民を統治すべきひとは、彼自身の中に、あれこれの特定のひとではなく、人類を読まねばならない。」これをなすのはどんな言語や科学を学ぶよりも難しいことをホッブズも認める。しかし「私が自分の読み方を整然とかつ明瞭に示してしまったからには、他のひとに残された苦勞は、彼自身の中に同じことを見出さないかどうかを考察することだけだろう。というのは、この種の学説には、このほかの論証の余地はないからである。」近代政治哲学の創始者を自任したホッブズの勝利宣言であると解釈できるであろう。しかし、ホッブズにとっては残念ながら、全人類にとってはおそらく幸運にも、彼の哲学体系は唯一の真理としては普遍的に受け入れられなかった。

ところで「汝自身を知れ」という格言は政治哲学の創始者と呼ばれているソクラテスを想起させる。彼自身は生涯で一冊の書物も著述しなかったのだから、現代のアカデミズムの基準では彼は政治哲学者の名にまったく値しないかもしれない（もっとも彼は大学に職を求めたりしないであろうが）。本を著さなかったソクラテスに関して興味深い事実は、しかしながら、彼が古い書物を読むことを愛したこととその読書法であろう。クセノフォンはソクラテスの読書の目的とその独得な読書法を次のように伝えている。「ちょうど他のひとが良い馬や、犬や、鳥によって快樂を感じるように、私自身は、それにもまして、良い友たちによって快樂を感じるようになる……。そして私の友たちと一緒に読みながら、私は、いにしへの賢者たちが書物にして後世に遺してくれた宝物を隈なく調べる；そしてもしわれわれが何か善いものを目にすれば、それを取り出す；そしてもしわれわれが相互に友たち [or 役に立つよう] になるならば、それを大きな利得とみなすのである。」（『メモラビア』第Ⅰ巻、第6章）

ホッブズの古い書物に対する態度と読書の方法は、たしかに、ソクラテスのそれらとは非常に異なっているであろう。しかしそれにもかかわらず、両者はそれぞれの仕方ですべて「知恵の何たるかを読むことによって学べ」という伝統の活性化に大いに貢献したと言えるのではないか。その伝統において著者の役割と責任はもちろん非常に重要である。しかしそれに優るとも劣らない役割と責任を読者もまた果たし続けているのではないだろうか。

参考文献：トマス・ホッブズ『リヴァイアサン』（岩波文庫、中央公論社など）  
クセノフォン『メモラビア』（岩波文庫、京都大学学術出版会など）